

ブレイン インザ アクアリウム

DREAM PUNCH LINE

岸辺露華

written by Roka KISHIBE

A KAGEFUMI
SCIENCE FICTION SERIES

[A KAGEFUMI SCIENCE FICTION SERIES]

ブレイン イン ザ アクアリウム

岸辺露華

Dream punch line
by
Roka KISHIBE 2016

cover design and art direction
by
Matthew A. Keith
(t. m. production)

ブレイン イン ザ アクアリウム

フロントガラスから差し込む七月の朝日は、金曜日のくせに月曜日の鬱陶しく、僕を憂鬱にさせた。

青々しい田園の中の一本道を漫然と運転する。対向車も先行車もなく、追走車もない。ただただ真新しく、歩道と街頭まで整備されたこの通勤路には一体いくらもの税金が積み込まれたのだろう。初めて通ってからもう半年になるが、未だにそう思ってしまう。

代車で借りているデミオはずいぶんと好調で、自動車評論家が言うキビキビと走るといふのはこういうのなんだろう。

もういっそのこと、これに買い替えてしまおうか。

そんなことを考えていると視界に傾斜が付き、田園風景が植樹林のそれに切り替わる。と

言っても坂道になっただけで、道自体は相変わらずの直線道路だ。

規定で引いたような道を登り切った先で、急に視界が広がる。

バブル直後に県が産業団地として切り開いたその高原都市は、しかし思ったように誘致が進まず、三〇年を経過した今では大半の土地がメガソーラー発電所として利用されている。

そんな街の一角に僕の今の勤務先はあった。

大神生理科学研究所。

植え込みの中にどっしりと構えた御影石の銘板を横目に入場ゲートをくぐる。

車を降りて中央玄関に向かう。

その外観は国内の研究施設としては珍しく、曲線やガラス張りを多用した洒落た造りの建物だが、さもありません、最初から研究所として設計された建物ではない。

というのも、行政の博物館やら美術館やらをまとめた複合施設を建ててみたが、案の定採算が取れず処分に困っていたのを、研究所の母体となる財団が買い上げたのだ。

そのため、あちこち増改築されてはいるが研究施設としては最適とは言い難い。

「おはようございます」

中央玄関に入り、二回りは年上な受付嬢のお姉さんに挨拶するとびっくりするような勢いで喜ばれた。

「あら川上君！ もう出来ていいの？」

「ええ、ご心配かけました……」

……やたらに距離が近い。思わず一步引きそうになるがなんとか踏みとどまった。彼女くらいの年齢の女性からすれば僕なんかはまだ自分の子供と対して変わらない扱いなのだろう。

「もう、体は大事にしなきゃ駄目よ。交通事故なんて一步間違えればコレなんだから」

そう行つて彼女は右腕の袖をめくり上げて僕に示した。

白い手袋に覆われた手首から下は、遠目からみるとなんの変哲もない肌色なのだけど、流石にこの距離からだとは違和感が目につく。

上手く人の肌似せてはいるが、どことなく分厚いタイトの要は質感はごまかせない。また、シミも無ければシワもないその均質的な肌は、紛れもなく人工の合成皮膚だ。

二の腕の部分には生体接続用のカーボンフレーム、また手首と肘の部分が妙に膨らんでいるのも可動義肢の特徴を表していた。

いわゆる電筋義手の発展型として開発されたそれは、生体側へ埋め込んだ発信機が神経信号を増幅させる。その信号を腰につけた解析機が受信、解析し、義手側に送る。

生体側に手術が必要というデメリットはあるが、それでも前世代の義手よりも格段に精度

が向上し、解析機を別の場所に設けることにより義手本体の簡素化、軽量化にも貢献した。

義手本体も最新のカーボン技術が使われていて、可動部の動力源となるアクチュエーターとそれを制御する簡素な電子回路以外は全て炭素繊維だと言う。

受付のお姉さんが義手なのは以前から知っていたが、日常の仕事の中でそれを実感するとはなかった。それはそれだけ可動義肢の技術が進んでいるということなのだけど、だからといって体を粗末にしていけないということではない。

軽減されたとはいえ、人間の技術はまだまだ不自由がない生活ができるというレベルには達していないのだから。

「肝に銘じておきます」

その後、受付のお姉さんと世間話を交わしてから社員ゲートから入場した。

もともとはIDカードのチェックと、パスワードによる二重の認証があるのだが、二度手間になるからか今はIDカードのチェックしか行われていない。

いかにも田舎企業な考え方だ。

中に入ると幅の広い吹き抜けの中央廊下沿いに各研究室や会議室が並んでいる。

久々の同僚たちと簡単に挨拶を交わしながら、自分の職場へと足を進める。

中央棟から渡り廊下を通り別館へと向かう。

通称『箱の塔』といわれる直方体の建造物。

本来であれば中央棟から一回中庭を経由して玄関から入るのが正規ルートらしいのだが、セキュリティと利便性の問題から後付の渡り廊下を作って中央棟と『箱の塔』の二階を接続している。

『箱の塔』内部は四階建になっていて、一階二階は通常の部屋だが、三階から上は完全滅菌のクリーンルーム化されている。

僕の職場はその三階から上側なので、ここからが手間だったりする。

まずは、シャワールームで体を良く洗い、鼻を衝く匂いの消毒浴槽にたっぷり五分間浸かる。

滅菌済みのタオルで体を拭き、全裸のままエアシャワーを浴びる。これを三回繰り返し、徹底して最近と微粒子を削ぎ落とす。

加えて、滅菌処理済みと記されたビニールに入った作業着に着替え、同じく滅菌処理済みの封印のされたゴーグルとマスクそれにキャップを開封して着用。

最後に再びエアシャワーを浴びてようやく準備完了だ。

久々の入室準備に若干の疲れを覚えながらも二重扉のエアロックを潜ると、クリーンルーム側から微風が流れ込む。

細菌や微粒子の侵入を阻むため、向こう側の方が陽圧になっているためだ。

三週間ぶりの職場は果たして雑然と散らかっていた。

嚴重に微粒子レベル管理された環境にありながら、デスクの上には学術書や書類束が地層を作り、床にはクリップやボールペンが転がっている。

なんだか、テレビで見た漫画家の仕事場を彷彿とさせる光景だった。

ある程度は予想していた光景に辟易しながらも、研究室の奥へと分け入ると、この『箱の塔』の主はソファで朝のワイドショーを見ながらくつろいでいた。

「おはようございます。九頭竜主席」

僕が挨拶を投げかけると、彼女は彼女は長い赤毛を揺らめかせながら振り返った。僕とは異なり、マスクもゴーグルもキャップもつけていない。

「ああ、川上君おはよう。そうか、君今日から復帰か」

そういうと彼女はゆっくりと表情を変え微笑んだ。

「はい、その節はご迷惑をおかけしました」

「いやいや。それより体の方は大丈夫なの？」

そういうと彼女はソファにうずめていた体を起こし、立ち上がった。身長は一四〇センチほどで女性としても異様に低く、四肢も枯れ枝のように細い。肌の色も羽織った白衣に同化

しそうな程に白く、そのため赤毛が不自然なほどに赤く映える。

正直なところ彼女に体の心配をされているこの状況に凄まじい違和感を覚えた。

「ええ、もうばつちりです」

「そうか、それなら助かる。けど無理はしないでね」

彼女はゆっくりとした動きで仕事机に移動した。

肘掛つきの豪華な椅子に腰かけた彼女の姿は、その身長に幼い顔立ちも合わさって、年上の女性にも関わらずかわいらしいという形容詞がびったりだった。

「さてさてさて、川上君。今日の予定の確認と行こうか」

『箱の塔』の主、九頭竜火奈汰はゆったりとした口ぶりでそう告げた。

僕がこの『箱の塔』の勤務を命じられたのは出向後の研修を終えた直後、今から五か月前のことだ。

けれども、僕はそのずっと前から九頭竜火奈汰について知っていた。

そもそも国内はおろか海外でも彼女のことを知らない業界人はいないし、一般人にも名前が知られている。

それは彼女の研究業績もさることながら、それ以上に彼女のプロフィールが特徴的で、人々

の印象に残りやすいからだろう。

彼女を最初に取り上げた経済新聞曰く、『水槽の中の天才』。言い得て妙で、現在でも彼女の代名詞となっている。

九頭竜火奈汰は医学博士であり、脳科学者でもある。

その他、素材科学や情報工学など理系科学全般に横断的な知識を持ち、多分野の知識や研究を結び付け、組合せ、人工臓器や可動義肢などの分野で顕著な成果を残している。

一言で言ってしまうえば、掛け値なし、真正の天才であり。

一〇代前半で博士号を取得し、三〇代前半の現時点でいつノーベル賞を取得しても不思議ではない状況である。

その反面、彼女は先天的に重度の免疫障害を抱えている。

症状の安定した現在でも、この無菌室から出て生きていくことはできない。さながら、水温・水質を厳重に管理された水槽で暮らす熱帯魚のように。

そのため『水槽の中の天才』、それが彼女の通り名となっている。

医学版、あるいは日本版のホーキング博士といったところだ。

「本日は一〇時から業務会議、午後は一四時から地元の高校生向けの特別講義の予定が入っています」

僕は本日の予定を手短に確認し、反応を待つ。

彼女は眼を閉じて数秒思索した後、口を開く。

「よろしい。それでは本日の業務を開始しましょう」

そういつて方を背伸びをして山積みになった書類に取り掛かった。

彼女の研究所での役目は『主席統括研究員』。有体に言ってしまうえば、実務方のトップだ。

そもそもこの研究所自体が、彼女をヘッドハンティングするためにスポンサーである大神財団が設立したもので、所長は別にいるがそれはあくまで予算などの事務方の管理の管理を行なう役職で、研究の方針や内容は彼女に一任されている。

そんなわけで、彼女の机には各研究室からの進捗報告、外部機関からの連絡等、膨大な情報が後から後から押し寄せてくる。

本来であれば、電子媒体で管理するのが最適であるはずなのだが、彼女の個人的な趣味のため紙媒体での管理となっている。

そういう我儘を通すことができるものも、彼女がこの『箱の塔』という水槽の、ひいては研究所自体の主であるが故だ。



久々の出勤だったが僕は、けれどもも累積した仕事の山に忙殺されるようなことはなかった。どうやら、九頭竜主席が自分の仕事の片手間にほとんどをやっつけてしまったらしい。

そのため、基本的には不在期間の処理内容を追いかけて、処理済みのまま放置された書類束を整理し、収納するのが主な仕事となった。

ここの仕事は嫌いではない。

出向という形での勤務だが、もともとの所属よりも自分の能力を正當に評価してくれる。仕事の内容も先進的で自らの血肉となつて行つてるのがはつきりとわかる。

なによりも集中できる仕事は煩わしいあれこれを考えて憂鬱にならなくていい。

一〇時までには軽く書類を整理し、その後は箱の塔から出られない九頭竜主席のために電話会議のセッティングを行う。

会議中は書類の準備や、書記を行う。

昼食はいつもはなら箱の塔の外へ一度出て社員食堂で済ませるのだが、今日は忙しいので九頭竜主席のゼリー飲料を分けてもらった。

ほとんど味はしなかったが、ないよりはマシだ。

◆
午後からの業務は高校生向けの特別講義だ。

といっても、生徒達をこの『箱の塔』に招き入れるわけではない。

知っての通り、この『箱の塔』へ入るのはすごくしんどい手順をこなさなければならぬし、そもそもここには一クラス入るようなスペースはない。

「さてこのように、現在では人間の神経信号を受信する研究の発展として、外部の刺激を電気信号へ変換し脳に認識させる研究が行われています」

九頭竜主席の前には一台のカメラが設置され、エリにはピンマイクがついている。僕の手許のパソコンの画面には興味深そうに話に聞き入る教室の生徒達の様子が写されている。

宇宙ステーションにいる宇宙飛行士達が地上の学生たちに行うのと同じ通信授業だ。

これなら出向く必要もないし、出迎える必要もない。

この手の授業は月に二・三回行っている。

主には大学院生や大学生向けだが、今回のような高校生向け、場合によっては海外の学生向けの授業も少なくない。

目的としては半分は慈善事業だが、半分は優秀な学生に対して自社に興味を持ってもらい、

あわよくば青田買いしてしまおうという魂胆なのだろう。

「現在のところで一番研究が進んでいるのが触覚、ついで視覚というところですよ。実験段階では品質的には問題のない段階まで技術開発が進んでいるのですが、残念なことにここでも重量や安全性の壁が立ちはだかっているのが現状です。」

九頭竜主席の授業は中々に上手い。この業界に身をおいている僕だからストンと理解出来ているというのも勿論あるのだろうけど、門外漢が見たとしても、少なくとも僕の通った大学の教授陣よりは面白い授業だと答えるのは間違いないだろう。

さて、授業は淀みなく進み、今は脳科学や人工臓器などの研究の全般に対する質問のコーナーとなっている。

「九頭竜先生。質問してもいいですか？」

画面の向こうで小太りな男子高校生が手を上げている。僕がパソコンで現地のスタッフに支持を出すと、少年の手許にマイクを運んで行く。

「はいどうぞ」

「今現在の技術でサイボーグを作ることには可能なんですか？」

少年の質問は簡潔だったが、業界の人間からするとちよつと頭をひねる問題だった。

「ふむ、サイボーグか……。今日授業でもお話ししており、人工関節と骨格、可動義肢、

各種の人工臓器については元の体と完璧には同等とは言えないまでも開発されています。きつとコストも安全性も度外視して最新技術をつぎ込めば人工物で補える人体機能の範囲はもつと広がることでしょう」

確かにここ一〇年程でこの分野は飛躍的に発展し、研究段階だった技術は多く実用化され、さらにその先が研究されるようになった。

九頭竜主席自身もその発展の一翼を担っていると言っても過言ではない。

「だからこそ、どこからがサイボーグと呼べるのが難しくなっています。ペースメーカーを入れたおじいちゃんはいっぱいいますけど、そう言った方をサイボーグじいちゃんとは呼ばないですよね？」

主席、いまの子どもは絶対そのマンガ知らないと思いますよ。

「じゃあどれくらい機械化した人をサイボーグと呼んだらいいとおもいますか？　そうですね、その黒縁メガネの子。そうそう、後ろから二番目の列の君」

九頭竜主席の突然の指名に教室でスタッフが動き、面食らっていた生徒にマイクが渡る。

「えっ、えっと五〇%くらい？」

「うんうん、五〇%、つまり半分。たしかに体の半分が機械になってたら相当機械化率が高いっておもうよね。でも体の半分ってなんだろうね。例えば両手両足が可動義肢の人がいるとす

る。一方で内蔵が全て人工の臓器の人在るとする。ちよつと不謹慎な話だけど、この二人でどっちがサイボーグ率が高いと思う？」

教室が静かになり誰も答えようとはしない。当たり前だ、この質問には答えがなく、僕も九頭竜主任にもどつちかわからないのだから。

「答えはわたしにも解らないでした。ちよつと意地悪な問いかけでしたが、わたしを含めて最先端の研究を行っている人達にもこの問題は解らないのです。というか、あまり真剣に定義付けする必要もないですしね。ただ、一つ言えることがあるとすれば、ただ一箇所だけ、おそらくどんなに技術が進歩しても当面の間は機械に置き換えることが出来ない場所があります。さて、その三つ編みの女の子、どこだか解るかな？」

「えつと……脳？ ですか？」

あてられて少女はマイクを向けられると、気弱そうな外見とは裏腹に意外とはつきりした口調で答えた。

「そう、正解！ 流石に思わせぶりだったかな？ 今日学校から脳科学をテーマにお願いされているのでちよつと強引に話の流れを引っ張ってみました。さて、脳だけに手前味噌な話をする、現時点で脳以外の全ての部分を機械で置き換えることは一応は可能です」

画面の向こうの少年少女達が石を投げ入れられた水面のようににわかにはわかにざわめく。

「ただし一応と留保がつく通り、皆さんが思っているような人間型のサイボーグはまだ出来ていません。現代の人工臓器は、あくまでの他の臓器は無事に生きていることが前提で作られています。だから、脳以外の全てを人工の機械でごまかすとなると、人工臓器を補助する為の機械が必要になり、更にそれを補助する機械、それらを動かす為の電源、システムの冗長化の為のサブシステム、つまり予備の機械をという具合に再現なく機械が増えて行きます。そうやって来ると、皆んなの夢を壊すように悪いんですけど、とても人間の体のサイズには収まらなくなってくるんですよ」

丸頭竜主席はヤレヤレといった感じの苦笑を浮かべる。

とは言え、先程の発言は高校生達にはよっぽど衝撃的だったらしく、画面の向こうのざわめきは未だに興奮覚めやらぬ様子だ。

そのざわめきの中で、スポーツ刈りの少年が手を上げていたのでマイクを向かわせる。

「先生、人のサイズに収まらないなら、どのくらいのサイズならできるんですか？」

確かに、そこは僕も少し気になっていた。

その興味に従い視線を丸頭竜主任の方へ回すと、なんだか少し驚いたような表情をしていた。が、それもほとんど一瞬のことですぐに先程までの自信に満ちた笑顔に変わる。

「良い質問ですね。と言っても実例があるわけではないのでなんとも言えないんですけど。

作者名は失念してしまいましたが、たしか四、五年前にアメリカの学者さんが書いた論文だったと思います、それによるとだいたい二五メートル一杯分の面積が必要だと見積もられていました。現実に行おうとするなら、もっと色々な安全装置なんかも必要でしょうからもっと大掛かりなことになるでしょうね」

よくぞ聞いてくれた。嬉々として語る九頭竜主席の横顔はどことなくそんな風な感情が見て取れた。



一時間の特別授業の後は再び書類の整理に追われ、気づいたら館内放送で五時の時報が流れ出していた。

「おつかれさま、今日はこれで終わりにしようか。また来週よろしくね」

「はい、お疲れ様です」

他の研究室はともかく、この箱の塔には基本的に残業はない。

そもそも、この施設は九頭竜火奈汰の住居でもあるわけだから、彼女が仕事を打ち切ったからそれ以上居残ることはできない。

僕は手早く仕事を切り上げて箱の塔を後にした。



箱の塔は入るのは厄介だが、出るのは簡単だ。

やる作業といえば、支給品の作業服とゴーグルを使用済みの札のついた籠に入れて私服に着替える。キャップとマスクは使い捨てなのでそのままダストシュートへ。もちろん、エアシャワーも消毒液の風呂も必要ない。

箱の塔と中央棟を繋ぐ渡り廊下へ出ると、見知った人物と鉢合わせになった。

「あら、川上さん。今お帰りですか？」

その人は若々しい女性で、薄紅色の着物を羽織り、長い黒髪を簪でまとめた、理系の研究施設におおよそ不釣り合いな出で立ちだったが、そんなことが気にならない程度には僕はその人に慣れてしまっていた。

「これはこれは、大神様。ようこそお越しくださいました。九頭竜先生は先ほどお仕事終わられました、私も切り上げてきたところなんですよ」

すかさず顔が勝手に営業スマイルを作りだし、声のトーンが上がる。

我ながら、大人になったんだと思いつながらも、けれども、それだけ丁重に扱う必要のある人物であることには間違いないのだ。

大神幾望。

その名の通り、この大神生理科学研究所のスポンサー、大神財団の経営者一族大神家、その中でも跡取り候補の筆頭。現総帥の孫で、創始者の玄孫に当たる女性だ。

「そうですか。ああ、私のことはお気になさらず、火奈汰のところには勝手に伺いますから」幾望さんの物腰は柔らかく、少し糸目気味だが大和撫子然とした美人で僕のような下っ端職員に対しても礼儀正しい。

が、逆に恐縮しまいそうだ。

「そうですか、それでは私はここで失礼させていただきます」

「はい、お気を付けてお帰りください」

幾望さんは軽く会釈を交わすと箱の塔の中へ消えていった。

幾望さんはどこで知り合ったのかは知らないが九頭竜主席と旧知の中で、大神財団が九頭竜主席をヘッドハンティングしたのも彼女達の縁があったかららしい。

実際、それは大正解だったらしく、九頭竜主席の基礎研究を利用した医療製品のおかげで大神財団はここ数年で目覚ましい勢いで収益とシェアを拡大している。

国内でも精々中堅どころだった医療器具メーカーが、一〇年で世界の製薬メージャーと肩を並べる程までに成長している。

反面、技術力や収益力といった体の成長が先行し、経営力やセキュリティ、法務能力などの体を包む服の拡大が追い付いていない感は否めない。



職員ゲートを抜けて中央玄関から駐車場へ向かうと、見慣れた黒いアルファードが止まっているのが目に留まった。

「ああ……………」

憂鬱がため息となって流れだし、どんよりと気分がこみ上げてくる。

運転席でタバコを吸っていた男性がこちらに気づき、手招きをしている。

素直な所、逃げ出してしまいたい気分だったが、そうもいかないでおとなしく助手席側に乗り込むことにした。

「……………ご無沙汰してます。藤島さん」

車内にはタバコのヤニが充満しており、気を抜けば咽てしまいそうな程だ。

「おう。なんだ、元氣そうじゃねーか。交通事故で休んでるって聞いたから手か足でも負ったのかと思ったが。なんだ？ 仮病か？」

運転席の男はハンドルにもたれ掛りながら、右足を貧乏ゆすりさせながら高圧的な眼差しでこちらを睨む。

「いえ、そういうわけでは……」

僕はこの男がどうあっても嫌いだ。

結局その目を直視することができず、目線を逸らしてしまった。

「ふん、まあいい。おい、とっとと乗れよ」

「……………はい」

しづしづ、助手席に乗り込みドアを閉める。

車内にはいかにもマイルドヤンキーが好きそうな装飾が施されており、反面、隅の方には埃がたまっていた。

「手短に話すとな、お前が休んでる間に本社の方から催促があった。『早くしろ』とな」

ここでいう本社というのは、僕と藤島さんの出向元の企業のことだ。

そう、僕はあくまで出向という形でこの大神生理科学研究所に勤務しているのであって、出向元の会社は実は大神財団の外にあるのだ。

「また、無茶を仰る……………」

思わず不平不満が口から漏れた、瞬時に藤島の「口答えするな！」といういつもの怒鳴りが飛んでくるかと思ったが、そうでもなかった。

「それについては俺も同意見だが、薬害事件がいよいよアメリカで敗訴が確定しかけてる。そうなりや、一気に経営が吹っ飛びかねない。気が気じゃねーんだろうよ」

そう漏らした藤島さんも、どこか諦めたような顔で遠くを見つめていた。

「そう……………、ですね」

僕と藤島さんは世界四位のシェアを持つアメリカの製薬企業『コート社』の日本法人に所属していた。

といっても、日本法人はもともと傾きかけた日本の弱小薬品会社を買収して成立したもので、看板だけ外資系の根っからの日本企業で、お世辞にもホワイトな企業ではない。

本家のコート社は自由な企業風土で知られる大企業だが、それも今は昔、新薬の開発に失敗しその損失隠しのため粉飾決算を行っていたのが発端で経営が傾きはじめ、現在お膝元のアメリカでは政府とグルになって隠していた薬害事件が政治問題化、いつ破産しても不思議ではない状況となっている。

本来であればその辺の事情は海の向こうの下っ端職員である僕らにとっては無関係ではな

いが、どうしようもないことで、ある意味地震や津波のような天変地異なのだけだ。

しかし、僕や藤島さんがこうやって出向している本当の理由は、その辺の事情と深く結びついている。

産業スパイ。

大神生理科学研究所の先進研究を盗み取り、それを経営の立て直しに充てようという魂胆なのだろう。

控えめに言つて厚顔無恥の極みといった行為だ。

「お前が休んでいる間に、こっちの下調べは済んだ。後は動くだけだ。明日動く、いいな」
「えっ……………」

藤島さんがあまりにも事も無げに語るの、僕は一瞬返答に詰まった。

「そんなに驚くなよ！どうせどつかでやるんだ、明日でも明後日でも一緒だろうが！」

逆切れ気味に藤島さんは怒鳴り、僕の反論を許そうとはしない。

いや、僕も藤島さんもここで議論することの不毛さは暗黙の了解としてよくわかっていた。

僕らがやらなければならないことを決めるのは、僕ら自身ではないのだ。

「……………すいません」

「謝んなよ、クソが」

大の男が二人して遣る瀬無い感情と置き場の無い不満に、しばし閉口し、沈黙した。

「ほら、こいつもってけよ」

明日の打ち合わせを簡単に済まし、車から降りる間際に藤島さんから黒いアタッシェケースを渡された。見た目に反して左程重くはない。

「本社から届いた。中には無針注射器が入ってる。中身は即死性の毒薬だ」

「毒薬って！」

「んな顔すんなよ。なにも必ず使ってわけじゃねーんだから。けどまあ、薬品研究の過程で発見された社外には知られてない物質で、なんでも心臓発作を誘発するからほぼばねーんだとよ」

藤島さんは投げやりに解説すると、どう見ても暗殺用にしか用途のない劇物を僕に押し付け、その場から逃げ出すように車を発進させた。



暗闇の中、名前も知らない鳥の声だけが響く。

夜空は手を伸ばした木々に遮られ、月明かりも届かない。

僕はそんな闇の中を逃げ惑っていた。

足を取る泥沼を踏み散らし、行く手を遮る藪をかき分けながら、吐きそうになる痛みを無視しながらひたすら進む。

ずぶ濡れの足は踏みしめるたびに刺すように痛み、指先は傷だらけ、全身の筋肉は悲鳴をあげ、酸素の足りない肺は押し潰れそうだ。

そんな状況にあつて僕は冷静だった。

だって、これは夢なのだから。

意識を取り戻してから毎晩のように見る悪夢。それも、はっきりと夢だと自覚できる明晰な夢。

けれども、夢のくせにちっとも思い通りにはならない。

この僕は何から逃げているのだろうか？

振り向けば僕を追いかけている怪物か化け物の正体もわかるのだろうか、僕の体は全く僕のいうことを聞かない。

僕の体はすっかり僕以外の意思、駆り立てる感情に乗っ取られている。

その内訳は複雑だ。漠然とした恐怖、羞恥、悲しみ。生まれてきてから今まで重ねてきた負の感情が、一度にフラッシュバックしたかのように僕の中で暴れている。

ああ、逃げ出してしまいたい。

その感情は僕にはよくわかった。だって、僕自身のことだから。

頭の中を流れる感情の礫を一つ一つ眺める。

人間関係、金銭関係、仕事関係、どれをとってもろくでもない。

夢は人間の記憶の再構築に過ぎない。そういう意味ではここも結局は現実の延長線上でしかない。

白けた絶望で逃げ惑う僕を傍観していると、不意に進行方向から腕を捕まれた。

「こっちだ。はやく」

その声はどこかで聞いたようで、けれども誰の声かはわからない。

暗闇の中でうすぼんやりと見えるその人は女性の様だったが、顔はクレヨンで塗りつぶしたかのように闇に隠されていた。



「……………あつ」

半開きの瞳に味気ない天井が映る。

眠っていたはずなのに体が重い、まるで本当に走ってきたようだ。

……………はて、どういう夢だっただろうか？

ベットの上でしばし思索してみたが、寝ぼけた脳みそはフリーズしているらしく動きが重い。

まあ、どうせこの現実よりは悪い夢ではないのだろう。

そう思っ僕は朝食をとることにした。

お湯を沸かし、カップスープとトーストを用意する。

冷蔵庫には卵もベーコンもなかった。代わりに昨日藤島さんに押し付けられた暗殺薬が保管されている。

目に入るだけで憂鬱な気分が増幅される。

垂れ流されるワイドショーにも碌なニュースはないが、とりあえずつけておく。他人の不幸でも見ていないと自分の不幸で気が滅入りそうだったから。

『次のニュースです。脳梗塞で意識不明の状態が続いている演歌歌手の大河原信一さんです

が、この度脳深部干渉療法を受けることとなりました』

脳深部干渉療法。

仕事柄聞きなれた単語が流れたので意識がそちらに向いた。

簡単に言えば、頭蓋骨を切開して、脳の機能が低下した部分に電極を差し、刺激することで機能を回復させる手術だ。

かつては刺激したり、脳内の伝達信号の乱れを矯正したりしていたが、現在ではスパコンと組み合わせることにより、完全に失われた機能を脳の空き容量に代替させ復活させるという部分まで実用化されている。

この場合は脳梗塞で死んだ脳細胞が担っていた役割を別の部分に担当させるよう書き換えるところといったところだろう。

脳というのは不思議なもので、各モジュール毎に処理が決まっているそうさ。それが相互に連帯しネットワーク化することで全体としての機能を発揮している。

人類の科学が解き明かしたところによるとモジュールは全体で五七二。とはいえこの数はその機能が分かってきている範囲で、実際にはもっと多いし、そのモジュール自体が無数のモジュールが複合して出来ているというのが通説だ。

他方で脳というのは極めて拡張性の高い機関で、新たなモジュールを自己開発して常に最

適化している。

例えば、食べる、息をする、眠るというような動作は基本的にプリセットされている。一方で箸を使う、車を運転する、言葉を使うという機能は後から開発される。

この拡張性の高さを利用して、失ったはずの機能を再び開発して取得させるというのがこの手術の真髄だ。

今は安全性や手術費の問題から、植物状態の人間を回復させるための技術という側面が強いが、これが発展すれば例えば熟練した技巧を丸々他人に移植するようなことも可能だ。

そうなれば、教習所に通うことなく免許を取得することも、手術一発でバイリンガルになることも可能なのかもしれない。

まあ、社会の倫理がそれを許すかどうかは甚だ疑問なんだけど、少なくとも遺伝子操作による人工的な天才の創造よりはましだろう。

「……………てか、下手したら僕もこれ受けてたんだよなあ」

焼きやがったトーストにマーガリンを広げながら、誰にともなく独り言を漏らす。

といっても、実感が無いというのが正直なところだ。

二週間前、僕はどうも交通事故を起こしたらしい。

らしいと言うのは起こした瞬間の記憶が全く無いからだ。

気がついたときには集中治療室で、いつの間にか二週間が経過していた。まるでタイムスリップしたかのような状態だ。

いや、記憶どころか物的な記録もない。

単独事故で相手もなく、突っ込んだとされる電柱もすっかり復元されている。車両も修復不可能ということで廃車になってしまったし、目撃者も、事故の様子を移した監視カメラもなかった。

そして僕自身も意識が戻らなかっただけで、外傷と呼べるモノは何一つなかった。

医者の話だと、打ちどころが悪いとたまにそういう症例があるとのこと、僕もなんとなくその言葉に納得していた。

その一方で、植物状態からうまく意識が回復すると言うのは珍しいらしく、医者は脳深部干渉療法も検討していたが家族に連絡がつかず困っていたとのことだ。

結局、警察も病院もそこまで暇ではないので、適当に処理がなされて話は終わった。

僕はどうにも狐につままれたような心地だったけど、収まりかけてるモノをほじくり返して困るのは当事者の僕自身なので後は保険屋に任せて深く考えないことにした。

「家族………か」

不意に、食事の手が止まった。口の中に広がる小麦粉の味が段々と無機質なものへ変わっ

て行くような気がした。

医者の話だとうやら、というよりも、やはり両親は見舞いに来なかったようだ。

僕自身は意識不明だったのだけど、そもそも今何処でなにをしているかなんて教えていないので現れるはずもないのだけど。

そう考えるのは心の何処かで、あの両親に期待して、心の何処かでやっぱり裏切られた気持ちになっているからだろうか。

控えめに言つて、最低の両親だった。

尻軽女とアル中の男の組み合わせで、子どものことよりも自分の楽しみを優先させる、非常に分かりやすい屑だった。

今更ながら、僕がこの程度の歪んだ人格で済んで居るのはある意味奇跡かもしれない。

あるいは、あの両親が子どもを殆ど放置していたのが、結果として悪影響を最小限に抑えたのかもしれない。

いずれにせよ生まれる場所を選べなかった僕は、家出するように奨学金を取って大学へ進学し、それ以降は一度も連絡を取っていない。

期待する方が間違っている。けれども、あの人達に期待してしまうのはそれ以外の代替方法を知らないからだろうか。

そもそも今の僕のおかれて居る現状は、あの人達が諸悪の根源だとも言える。

あの人達から逃げ出した僕は、奨学金とわずかばかりのバイトの収入を元手に苦学生をやっていた。

もちろん、お金は貯まるどころか、奨学金という名の借金が嵩む一方で、気がついたときには数百万円という額になっていた。

結局、まともな就活費用も時間も捻出できず、流れついたのが今の職場というわけで。

借金さえなければとくに辞めてやってる程のブラックだが、それもできず流されている。全部、あの親の元に生まれたがための不幸だ。

けれども、軽蔑はしても、積極的に憎む気にはなれなかった。と言うより、関わりを持ちたくない、思い出したくないというのが本音だ。

我ながらに我俣だとは思うけど、あの人達程ではないはずだ。そう願いたい。

「もう……………、やめちゃおうかな……………」

思えば、会社に義理立てして、こんな危ない橋をわたる必要はない。

このネタを内部告発すれば、今の会社にはいられないだろう。だが、然程価値のある会社とも思えない。借金もあるけど、ヤクザから借りてるわけではない。相手は公的な行政法人だ、ない金を回収する能力はない。

それに踏み倒すわけではなく、次の仕事を見つけて食いつなぐまでの間の支払いができなくなる、それだけだ。

……いや待てよ？

僕の奨学金には確か親権者が保証人になっていたはずだ。

となると、僕の支払いが滞ればあの両親に請求が回る。どうせ、あの両親のことだから碌に支払いができるとも思わないし、できたとしてまずしない。

それはどうでもいい。

ただただ、あの人達に関わるのが嫌だっただし、借りを作るような形になるのがひどく癪に障った。

それに、職を失えばこの仮住まいも引き払わなければならない、そうするとあの人達の家
に転がりこむことになるだろう。

「それは………、嫌だな」

結局は僕は、生まれのしがらみから抜け出せないままか。

煮え切らないまま、朝食を片していると久しく音を効かなかった玄関の呼び鈴が響いた。

「おう、迎えにきたぞ。さっさと準備しろ」

そこには「まさか逃げようとしてたんじゃないだろうな」と言わんばりに眉間に皺を寄せ

た藤島さんが立っていた。

どうやら僕にはもう選択肢は残せていなかったらしい。



車高を下げたアルファードの乗り心地はあまりよろしくなかった。まあ、狭いトランク部分に無理やり座っているというのもあるのだろうけど。

今回の作戦としては、藤島さんが人の目につくように行動してアリバイを作り、逆に僕が人目を避けて研究所へ侵入して研究資料を持ち出すというものだった。

どうやら、僕が意識を失っている間に色々調べたらしく、素人目に見て中々細部まで煮詰まった作戦だった。

大神生理科学研究所は元々は研究施設として建てられた施設ではない。

その為セキュリティの面では穴が少なくない。だから入り口こそそれなりに固めてはあるが、中に入ってしまったえば結構適当だ。他にも電子媒体のデータには一応パスがかかっているが、紙媒体への印刷は制御されていないとか、挙げていけば細かい脆弱性はキリがない。

他の研究機関では重要なデータに対しては三重四重にセキュリティを施して保護してい

る。データを管理する施設を物理的に隔離し、入退出を細かく制限し、パスワードをかけ、データ自体に暗号化処理を行うと言った具合だ。

これならば一つのセキュリティを突破されたとして、二つ目、三つ目のセキュリティがブレーキとなる。

しかしこの研究所はその点で甘い。

確かにセキュリティシステムが万全な時は多重化なんて仕事の効率を下げるだけなのかもしれない。しかし、何かのきっかけでセキュリティに穴が空き、そこを悪意を持ってこじ開けられたら大きな脆弱性となる。

藤島さんの調べによると、今日は電気工事のため一部のセキュリティ警報が解除されるということだ。

アルファードの荷台から降りた僕は、建物を回り込むように移動する。駐車場には何台かの工事業者の車と作業着姿の男達が見えた。どうやら情報は正しい様だ。

予め外側から開閉できるように藤島さんが細工した窓から侵入する。ここには監視カメラがない、いつもならそれで問題ないのだけど窓の開閉センサーがオフになっている今は致命的な欠陥だ。

「ヤッ………」

装備を確認する。念の為、ペンライト、ナイフやピッキングツール、ハンマーやテープ等泥棒の七つ道具は持たされているが使う場面があるかどうかは微妙だ。

他にはデータを記録するためのUSBメモリやデジカメ、藤島さんが作ったセキュリティ回避用の進行地図と偽造カードキーそして、

「……………」

昨日渡された、暗殺毒の入った無針注射器。デリンジャーのような形をしたそれを、僕は結局持つて来てしまった。

こんなものを使うようなことになれば、その時点で色々と詰んでいると思うのだけど。一体本社は何を考えてこんなモノを送って来たのだろうか。

いや、考えても仕方ない。今は目の前のことに集中しよう。

ルートを確認しながら、監視カメラの視覚を付き、延々と遠回りをしながら進む。

普通は研究施設では一本道を多用して、特定の部屋へのアクセスルートを限定しているのだけど、ここでは普通の建物と同じく目的の地まで複数のルートが選択できる。

「とは言ってもこれはちよっと馬鹿馬鹿しいな」

二階の窓の外、建物の装飾のために設けられた一五センチ程の突起。本来人が通ることのないその部分を足場にジリジリと進んでいく。

なんだけ『ミッション・インポッシブル』というよりジャッキー・チェンの映画みたいな立ち回りだ。

最終的に指定されたポイントから飛び降りて中庭に侵入する。

二階程度の高さとはいえ、運動不足の僕が耐えられるかヒヤヒヤしたが、案外どうにかなるものだった。

無事に到着できたことに胸を撫で下ろしつつ、監視カメラの視界を意識しつつ『箱の塔』へと匍匐前進で近づく。

いつもは渡り廊下から入っているため、こうして見ると少し新鮮だ。

一階の扉まで辿り着くと偽造カードキーをリーダーへ通す。

緊張の一瞬。

しかし、僕の不安に反して扉は音もなく開いた。

唾を飲み込んで『箱の塔』内部への侵入を果たす。

初めて入るが、一階は予想よりも暗い。外観から分かっていたが窓はなく、そして電灯もついていない。ただただ並べられた電子機器のLEDの小さな光が、ぼんやりとした蛍火のようにあちこちでついたり消えたりしている。

藤島さんの情報通りだ。『箱の塔』の三階四階については九頭竜主席の研究所兼私室となっ

ていて、二階には無菌室の維持のための設備がおかれている。

一階にはご覧の通り幾つかの電子機器が置いてある程度だが、実はこの『箱の塔』には地下階が存在し、そこがこの研究所全体のデータセンターとして使われているというのだ。

この階の電子機器はそこへ電力を送ったり、データやり取りをするための機器の様だ。

どうやって藤島さんがそんな情報を手に入れたのかと言うと、改装を行った地元の建設業者を調べあげ、その職員と偶然を装って居酒屋で接触。酒によってきたところで研究所の職員である身分を明かしてあれこれ上手く聞き出した様だ。

あの人は本物のスパイとして生きて行けるんじゃないだろうか？

さて、ここは所詮設備の一部が溢れ出しているに過ぎない、本丸は地下階だ。

暗闇に目が慣れたところで行動を開始する。

地下に通じているのはどうやら奥に設置されたエレベーターだけのようで残念ながら階段はない。

仕方が居ないので下方向の矢印のボタンを押してみると、幸いにも問題なく扉を開いた。

遠慮なく中に入る、ここから先は藤島さんの調査でも詳細は書かれていない。とりあえずエレベーター内には監視カメラはないようだ。

二階から四階までのボタンはゴムテープで封印してある。もしかしたら押せば動きはする

のかもしれないが、今回の目的はそれじゃない。

僕はB1を押して動き出すのを待つ。

しばらく間があつて音もなく扉が閉じ、再び間をおいて嫌に静かにしかし確実に、小さな箱は降下を始めた。

「……………おかしい」

たかだか一階降りるだけにしては妙に時間がかかる。

最初は僕の緊張が体感時間を引き伸ばしているのかと思つたが、どうやらそういうわけでもないようだ。

とはいえ、この密室の中で何ができるわけでもない。僕は言い知りえぬ緊張感に内蔵を締め付けられながら、それでも耐えるしかない。

しばらくして、ようやく、その永遠のような数十秒が終わる。

そこで僕は一旦安心した。安心したからこそ、ゆっくりと開いて行く扉の向こうの光景が理解できなかつた。

いや、きつとどんな精神状態であつたとしても同じだつただろう。

水銀灯で照らされたその空間は、地上の構造物に対して明らかに過大な容積を持っていた。大きな体育館をそのまま地中に埋め立ててしまったような、柱のない巨大空間。

その空間には銀色の大小様々な鉄パイプが張り巡らされ、用途不明の装置達を繋いでいる。パイプの間を縫うように金網の足場は生まれ。

全体像は立体的な迷宮と言った印象だった。

まるで小規模な化学プラントを屋内に押し込めたような、予想していたデータセンターとは程遠い光景に僕は言葉を奪われた。

「なんだ……これは……？」

一瞬にして、自分が何のためにここにきたのか、何に気をつけなければならないのか、そう言ったありとあらゆる事柄が脳裏から吹き飛ばされ、純粹な疑問が脳裏を埋め尽くした。

光がついているということは、誰か別の人間がこの空間にいるかもしれないということなのだ。圧倒的な疑問の衝撃に頭をやられた僕がそんなことに思いたるはずもなく、夢遊病患者のようにフラフラとエレベーターから吸い出されていった。

近づいて見ると、改めてその巨大さに圧倒される。

鉄パイプが複雑に絡み合い、その複雑さはパソコンのマザーボードを彷彿とさせる。

よく見て見ると、各所に細かい注意書きが英文で書かれているのだけど、文字が小さいのと専門用語だらけでパッと見では頭に意味が入ってこない。

「アドバンスト・ヒューマンノイド……」

読み取れた文章の一部が日本語的な発音で口から漏れる。

逐語的に訳すと『進歩した人類』というところだろうか。

どういう意味だ。そういう名前のプロジェクトなんだろうか？

疑問に思っていると、背後から物音が聞こえた。

「！」

とっさに身を隠す。

完全に油断していた。僕はここに忍び込んでいたんだ。

物陰から音のした方向を覗き見るが、人影はない。

どうする？

どの道、ここにはお目当ての研究データは無さそうだ。ましてや人に見つかれば全てご破産だ。

どうにかエレベーターまで辿り着いて、気づかれないように一度脱出するしかない。

何時になく、自分でも驚くほどに簡単に決心がついた。後は唾を飲み込み、息を潜めて実行に移すのみだ。

慎重かつ迅速に、矛盾する二つの事柄に気をつけながら歩みを進める。相手が何処にいるのかは解らないが、この際賭けに出る他ない。

ジリジリと移動し、扉へと近づく。暑くもないのに汗が頬を伝い、顎から滴り落ちる。

後二〇メートル、後一五メートル。

距離はじわりと、しかし確実に縮まって行く。

後は少し、走れば数秒もかからない距離に来て僕は気づいた。

背後から足音が迫って来る。

カツン、カツンとゆっくりだが確実に、金属の原生林に響くその音は此方へ近づいて来る。

どうする？

走り抜けるか？

距離なら直ぐだ、例えば音を立てたとしても捕まらなければ、まだなんとかなる。

判断が固まれば、後は行動するのみ。

身体を動かし、転げ落ちるように動き出す。

バタバタ派手な音が溢れ出るが、気にせず走る。

数秒のはずがやけに長く感じる、それでもゴールは目前、後はあのエレベーターのボタンを押してすぐに乗り込めばいい。

そう思考が先走った瞬間、右足が何か強い力で引っ張られた。いや、鉄パイプの出っ張りに躓いたのだ。

かくして僕は受け身をとることもできずに、前のめりに転けた。持ってきた道具が床にぶち撒けられ、無機質な床を転がって行く。

「あつ！ ああ!!」

「あまりの出来事に声もでない。

背中からは明らかに早くなつて、こちらへ近づく足音。

天に見放された。絶望へと落ちていくその瞬間、僕の眼球にそれが映った。

暗殺薬の入った無針注射器。

掌に収まる、デリンジャーのような形をしたそれは、空っぽになりかけていた僕の心になんの抵抗もなく入って来て、気がつけば僕はそれを握りしめていた。

もう、時間はない。

立ち上がると同時に、振り返ると、まだ姿の見えない追跡者に対して襲いかかる。

運悪く、物陰から姿を現したその人物は、いきなり襲いかかった僕に不意を突かれ、悲鳴を上げる間もない。

誰かかを確認する前に注射器の引き金をひく。

間髪入れず、毒薬が注入され、命を侵す。

相手の抵抗はほとんどなく、本当に生きていたのかも疑わしい程にすんなりと動かなく

なった。

僕は興奮の中にあつて、改めて相手の姿を確認する。

小さな体躯、細い四肢、赤い長髪に病的に白い肌、そして見覚えのある幼い顔立ち。

そこには九頭竜雨美の死体があつた。



昏い森の中でそこだけが明るく、ドーム状に切り取られて居る。

彼女は静かに燃える焚き木の辺りに腰を下ろし、細長い杖を火鉢代わりに、揺らめく炎を弄んで居る。

僕は彼女の対面に腰を下ろし、ぼんやりとこの後継を眺めていた。

火というのは人類の文明の象徴だが、なるほど確かにそれは僕らの遺伝子に刻まれているようだ。

空間的には森の闇と僕らを隔てるモノはなにもないのだけど、火の明かりはまるでレンガの家のような安心感を与えてくれる。

視線を彼女の方へ向ける。

相変わらず、顔が影になってよく判別できないけど、僕は多分この人のことをよく知っている。

まるで急に他人の顔と名前が認識できなくなったかのような、それでいてなんら不便も不安も感じない、そんな不思議な感覚だった。

「大昔のドラえもんの映画で、自分の望んだ夢を見る秘密道具が登場する話がある」

しばらく、焚き木をいじっていた彼女が唐突に何かを話出した。

いや、こういうことはよくあることなので、唐突という程ではないのかもしれない。

……いや、よくあること、なんだろうか？

しかして、僕のデジャヴなど知るよしもない彼女は話を続ける。

「そのひみつ道具なんだけど、裏の機能として、現実と夢の認識を入れ替える機能がある。つまり現実には起きているときの記憶を寝て居るときには夢として認識させる機能なんだ」

その映画は見たことはないけど、登場人物はよく知っているんでなんとなくのイメージはついた。

というか、夢を操作する装置なら二二世紀を待たずしてそのうちできそうな気がする。SFの世界っていうのは遥かに遠いように見えて、存外に近い。

『海底二万マイル』も『月世界旅行』も実現には一〇〇年もかからなかった。

もちろん、ビックライトやどこでもドアは無理でも、夢を操作する機械であれば一〇年先にはできていても不思議ではない。

「わたしはその機能の存在を知った時恐怖したね。そんな危険なモノがあつて良いのかと」

どうして？ 話半分に聞いていた僕は声には出さずにそう問い返した。所詮は子供向けのアニメだし、そもそもそれほど恐れる要素はないような気がする。

「だって、そうでしょう？ それは私達の現実を夢と同じく、無為で泡沫のように取り留めないものにしてしまう。いや、こうやって話して居る今現在が、あるはここまで積み重ねて来た過去すべてが、中身の無いからっぽな夢なのかもしれない」

彼女の言葉をぼんやりと、牛の様に反芻する。

なんとなく、頭に靄がかかって上手く飲み込めない。

つまり、夢を操作する技術があると言うことは、起きていようが眠っていようが、今自分が認識している世界が全て幻惑であるという可能性が潜在する。ということなのだろう。

「そんなのはあの思考実験と同じだよ。本当の自分は水槽の中で夢を見ている脳髄だけの存在ではないのかって奴」



脳髓を割り貫かれるような激痛に意識が引き戻される。

「ガッ……………」

俎上の魚のようにベットの所で跳ねてみたが、痛みが流れたのは一瞬で、後も引かずにまるで夢幻の様の霧散してしまった。

「……………」

意識は無理矢理叩き起こされたけど、体はまだ安定して起動していない。

今は何時だろう？

ふとそう思って、眼球だけ動かして壁の時計を探す。

六時四三分。壁掛けのデジタル時計はそう表示されている。

段々と覚醒がはつきりとしてくると、時刻の横に表示されている日付が気になった。

月曜日……………、僕の記憶が確かならば、眠りについたのは土曜日だったはず？ 日曜は寝

過ごしたのか？ 記憶にないな、最後の記憶はいつだろう？

土曜日？ 土曜日ってなにやっただんだっけ？

「あ……………」

身体から血が失われる錯覚に襲われる。動悸が強くなっているのに血圧が急低下する。

言葉が出てこない。焦燥が脳裏を焼き尽くして空白になり、燃え滓の喘ぎが口から吐き出される。

殺した。

確かに、あの首筋に暗殺薬の注射針を打ち込んだ感触が、未だにこの掌に張り付いたままだ。

倒れる華奢な身体、人形のように動かないその姿、全部が眼球に焼き付けられている。

間違いようもなく、あの時、僕は九頭竜雨美を殺害してしまったのだ。

殺して、殺害して……、いや、待て。

その後は、どうなった？

僕が、大神研究所へもぐりこんだのは土曜日の午前だった、そこから大回りをしたとはいえ箱の塔の一階へ侵入した時点では正午を過ぎていないはずだ。

くそ、あれからの記憶がすっぱり抜けている。

仮に日曜を丸ごと寝過ごしたとして、僕はどうやって部屋まで帰ってきたんだ？

箱の塔からそのまま逃げ去ったとして、死体はあのまま放置されているのか？ 藤島さん

とはどういう話になっている？

頭痛を覚える程に記憶を辿ろうとするが、糸は土曜の午前、あの地下室、あの瞬間、地面

に力なく臥す九頭竜雨美の姿でぶつとりと途切れている。

まるでそこから先には何もないかのように。

身悶えるように、絞りだすように、混乱する脳を動かそうとベットの上で頭を抱えていると、不意に携帯からけたたましく鳴り出した。

「！」

身体に電流が流れたかのように、不随意的に筋肉が引き攣った。その直後にドッと汗が流れ出し、恐怖と焦燥が内燃機関のように加速し始める。

着信、ではない。

僕が目覚まし代わりにセットしているアラームだ。

時刻はいつの間にか七時半を回っている。

いつもなら家を出て出勤しなければならぬ時間だ。

出勤？ こんな状況で仕事？

馬鹿げている。そこまで人間的な感覚が欠落した生き物じゃないはずだ、僕は。

……いや、下手に休暇を取ればそれこそ怪しまれるかもしれない。それにそもそも状況が全く分からない。

どのみち、藤島さんとは相談しないと。

携帯は、不味いかもしれない。連絡した形跡が残る。もし、捜査機関に僕達がマークされているなら盗聴されている可能性もありえる。

場合によっては、本社の方にも連絡を取らないと。

アイツらも無責任に殺人を強要するような真似をしたんだ。

仮に僕が捕まれば、アイツらも無関係では済まない。

いや無関係で済ませてなるものか！

とにかく今は動かなければ。

僕はその決意を奥歯で噛みしめ、車のカギを握り締めて家を発った。



通勤の車中、波のように押しは引いていく思考に翻弄されながらもなんとか研究所にたどり着いた。

太陽光パネルの高原の中に佇む研究所は、はたして異常はないように見えた。

周囲に警察車両の姿はないし、職員もいつも通りに通勤しているようだ。

まさか、まだ死体が発見されていないのか？

となると……、厄介だな。

普通にいけば、秘書として一番最初に『箱の塔』に入入りする僕が第一発見者をやらないといけないことになる。

かと言って、『箱の塔』に入らないでいるのであればそれもそれで怪しまれる。

殺人犯は殺した瞬間からその犯罪を隠蔽することに思考が切り替わると聞いたことがある。罪悪感よりも捕まることへの恐怖心が勝ってしまい、その恐怖心を押さえ込むため保身へと走るのだ。

「よっ、おはよう」

思案しながら歩いていると、急に後ろから小突かれつんのめった。

たたらを踏みながら振り返ると、そこには何時になく晴れやかな笑みを浮かべた藤島さんが立っていた。

「あつ……、おはようございます」

よく考えてみればすぐにでもあの後のことを問いただすべきだったのだけど、その見たことのない笑顔にあっけにとられ一瞬で頭から飛んでしまった。

「やったじゃねーか、おい。これで、戻れば役付だぜ」

酒でも飲んでるかのようなテンションの藤島さんは、僕の肩を抱き込み今にも歌いだしそ

うな勢いだ。

どうにも様子がおかしい。

まるで、土曜のあのスパイ作戦が大成功したかのような調子だ。

「いやいや、お前はやってくれると思ってたよ。お前の送ってくれたデータで本社の奴らは大喜びだったよ」

僕の送ったデータだって？

一体なんだそれは！ 僕はそんなモノは知らない！ どうなってるっていうんだ？

「あつ、あの！ 藤島さん？」

「おっと、いかんいかん。あんま大声で言うことじゃねーな。まつ、お前も後は平穩無事に
出向期間を終わらせろよ」

「いえ、そうでは……………」

「あつ、悪りい、時間だ。また飲みに行こうぜ」

藤島さんは自分の言いたいことだけぶちまけると、踵を返し、ちようど閉じかけていたエレベーターに飛びのって姿を消した。

なんだこれは……………？

藤島さんの背中を見送った後、数秒して冷や汗が一気に吹き出した。

どういうことだ？

藤島さんの口ぶりだと、明らかに土曜日に行った産業スパイが大成功に終わったことになつていた。

しかも、彼の思い込みではなく、実際に盗み出した研究資料はすでにコート社の本社へ届いている事になっている。

いや、それよりも、藤島さんは僕が九頭竜雨美を殺害したことに一言も言及しなかった。スパイの成功の前にはそんなこと些細な問題だから？

いや、いくら藤島さんがアウトローぶっているからと言って、流石にそれはない。

だとすると、僕が報告していないからその事実を知らないとか？

どれが正解で、どれが嘘なんだ？

「あら、どうしたんですか？ 川上さん。顔色が悪いようですけど」

いつの間にかうつむいていた頭を上げると、そこには和装の令嬢、大神幾望が心配そうに僕を覗き込んでいた。

「大丈夫ですか？ 救急車呼びますか？」

「あつ、いえ、ちよつと立ちくらみが……」

とっさにごまかせたかどうかは、彼女の顔をみると怪しい。僕の言葉に納得せず、余計

に心配そうな表情になった。

「今日は随分と早いですね、会議でも」

とにかく少しでも話題を逸らすために此方から話を振る。

「えっ？ ええ、今日の午後の理事会に出席するのでその準備で。先程も新製品の開発方針について雨美と打ち合わせしてきたところなんですよ」

「えっ？」

雨美？ 九頭竜雨美？

なぜこの人は九頭竜雨美の話をしているんだ？

いや、この人は九頭竜主席の親友で、ビジネスパートナーだ。彼女が九頭竜主席に言及してもなにもおかしくはない。

おかしいのは、なぜこの人は死んだはずの人間と会ったというか？

「……………あの、川上さん？ やっぱり体調が優れないのでしたら無理はなさらない方が」

「いえ……………」

なぜあんなに僕が殺した人間と会ったというのかと問い質したい感情を必死に抑えて込み、精一杯の精神力でどうにか返事を返した。

もはや体裁も何もなく、狂ってしまいそうな理性がギリギリの瀬戸際で踏ん張っているそ

んな状況だった。

体の中をのたうつ蛇を飲み込んで、どうにか一步を踏み出す。

「大神さん、申し訳ありませんが先を急ぎますので、僕はこれで失礼します」

振り返ることも足を止めることもせず、返事も待たずに走り出した。

少しでも止まってしまえばそこで意識を失ってしまいそうだったから。

渡り廊下を通り抜け、いつものまどろっこしい滅菌手続きを心臓の鼓動を感じながら済ませていく。

冷たく鼻を突く消毒液も僕の正気を取り戻すには足りない。

只の一秒でも早く、真実を知りたかった。

その一心で僕は乱暴の動作でエアロックを開いた。

果たして——

「どうしたんだい川上君。柳の下の幽霊でも見つけたような顔をして」

長い赤髪、枯れ枝のような四肢、小柄な体躯に幼い顔立ち。

当たり前のように、必然であるかのように、九頭竜雨美は胡乱な笑みを浮かべてそこにいた。

九頭竜雨美。

通称『水槽の中の天才』、最初にそう呼んだのはとある新聞社だったと思う。

その不幸な生い立ちと、反比例するかのような華々しい業績により今や彼女は国民的な知名度を誇る。

あるいはノーベル賞受賞者達よりも有名なのかもしれない。

けれども、その経歴は調べれば調べる程に不可解だった。

出生は日本ではなくアメリカという事になっているが、両親は共に日本人とされている。

が、家族構成についての明確な資料はない。そもそも、僕も彼女から家族の話を聞いたことはないし、短い間とは言え、僕が勤め出してから彼女に会いに来たのは大神さんくらいのものだ。

現在、日本国籍を取得しているのは間違いないが、これもいつの段階で取得したのかは謎だ。

出身大学はマサチューセッツ工科大、ここを飛び級で卒業。その後、ハーバードの大学院で博士号を取得している。

この経歴も彼女の恩師に当たる著名な研究者や、同級生などの複数の証言などから間違いはない。

だが、それまでの経歴は謎だ。

どうも日本国内の普通科高校を卒業したようだが、出身校は不明だ。

これほどの人物を輩出したのであれば、出身校側が盛んにアピールしそうなものだが、そう言った情報は一切でてこない。

そもそも、どうやって通学したんだ？

仮に、現在よりも病状が軽かったとしても『水槽の中の天才』が普通に通学できるのだからか。

調べてみた限りに置いて、学生時代の彼女を知る人々の証言は彼女の能力に言及するものが殆どで、彼女自身の生活や性格などに対する発言は皆無だ。

そもそも、彼女の患う免疫障害についても謎だ。

先天性ということになっているが、そうなれば遺伝子系の障害だと考えるのが普通だ。

しかし、学生時代があることを考えると進行性の病のようにも思える。

他方、今現在の彼女は無菌室の中で保護されているとは言っても、今日明日に死ぬような難病を患っている様子はない。

一般人からすれば不健康にみえても、病人には見えない。

加えて、遺伝子の障害には知的障害や精神障害を含むモノが多いが、知能に関しては人並みを遥かに凌駕しているし、精神的にも安定しているように見える。

ここまでくればある程度は病名が判断できそうなものだが、当てはまる病は見当たらない。そもそも医学の進歩のお陰で死に至る病というのはそこそこ減って来た。ガンなんかは特に顕著だが、治療法のなかった病についても段々と対処法が見つかり、完治とはいかないまでも症状の抑制や緩和に成功している事例はすくない。

だから無菌室の中でしか生きていけないと言うのはよつぼどのことだ。

となると、考えられる可能性は二つ。一つは彼女の病状はまだ名前のついていない極めて稀な障害である、もう一つは本当は免疫障害などはないということだ。

一つ目の説はないことはない。ただし、原因不明の病と言うものは得てしてえげつないモノが多い。それに現在の彼女を見る限り、小康状態にあるように見える。つまり未知の病であるにもかかわらず、治療法が確立されている。

それじゃもう、未知ではない。

それに、原因不明ならそれこそマスコミが食いつきそうなネタだ。けれども、どのニュースでもその部分は取り上げられず『先天性の免疫障害』を枕詞のように繰り返すだけだ。

プライバシーに配慮してといえばそれまでだが、マスコミが彼女のプライバシーにだけ特別な配慮を寄せるのもおかしい話だ。

では、もう一つの可能性、偽病説はどうだろうか。

なるほど、たしかにこれなら学生時代のことも、病名がでてこないことも、比較的彼女自身が健康そうに見えることも説明がつく。

では、何故不便を覚悟でそんな嘘をつく必要があるのだろうか。

彼女は掛け値なしの天才だ。天才だからといって嘘をつかないわけではないだろうが、少なくとも僕らみたいなボンクラよりは信頼がおけるのではないだろうか。

そもそも、こんな大掛かりな装置を使ってまで嘘をつく必要が何処にあるのだろうか。

単純に注目を浴びたいだけなら、彼女程の能力があればいくらでも方法はあったはずだし、水槽の中に籠っているだけでは逆にその能力を制限してしまっているようなものだ。

「ふん………」

思考が行き詰まり、開いていた本を閉じる。

カビ臭い本棚の谷間を抜け、抜き取っていた何冊かの學術書を返して行く。

大神研究所の図書館は一般に開放することを前提としていないためかなり窮屈な作りとなっているが、蔵書としては十分な量だ。

とわいえ、僕は結局何も得られなかったわけだけど。

『箱の塔』で九頭竜主席が生きているのを見た僕は、意識が飛んでしまいそうになる気持ち悪さを堪え、体調不良を理由に即座に早退した。

あれから、三日が経過した。業務終了後にはこうやって研究所の図書館に籠って、研究所の成り立ちや九頭竜主席のことを調べて見たが、これと言った情報は何一つ掴めず、逆に余計な謎が増殖するばかりだ。

結局状況はよくわからないままだ。

九頭竜雨美は間違いなく生きているし、スパイ行為自体は成功している。

どちらも、僕の記憶とは全く異なる。

今起きていることを現実だとすると、あの地下空間は一体なんだと言うんだ。

……いや、分かっている。

僕自身が狂ってしまったている可能性が一番高いのだと。

僕が妄想と現実の区別が曖昧になっているのだとしたら、全てに辻褃が合う。

つまり、あの地下空間も九頭竜主席を殺害したことも全て妄想で、現実では上手く情報を盗み出して、つつがなく研究所を脱出したのだと。

ただ、それを認めるのが怖くて、結局藤島さんにも詳細を聞き出せず。ここでこうやって

無為な調べ物をして時間を浪費しているのだと。

頭を抱えながら閉館間近の廊下を歩いていると、曲がり角で着物姿の麗人と鉢合わせた。

この研究所の実質的支配者、大神幾望さんだ。

「大神さん、先日はどうも失礼しました。お見苦しいところをお見せしてしまい……………」

「いえいえ、雨美に聞いたんですけど、体調不良だったのでしょう？　どうかご無理はなさ

らないくださいね」

彼女は白百合のように微笑えんだ。

それを見て今更ながら、僕が彼女の会社に対して働いた不義理が、罪悪感として心にかかる。

「それにしても、今日も顔色が悪いようですが。どうでしょう、そこで少し休んでいきませんか？」

彼女が指差す先には自販機と喫煙スペース、そしてソファが置いてある。研究所員達の憩いの場の一つだ。

「いえ、しかし……………」

「まあまあ、職員の健康状態に気を使うのも私の仕事のうちですから。どうぞ、遠慮しないでください」

「そう……ですか」

あまり強く断るのも失礼かと思い、彼女と少し話をする流れとなった。実際、僕も気が滅入っていたので、話を聞いてもらいたかったのかもしれない。

「それで、もしかしてコート社本社の立て直しの件を気にしてらしたのではないですか？」

缶コーヒを一口含んだ後、対面のソファに腰を下ろした彼女から思いがけない質問が飛んできた。

「えっ？」

反射的にそう漏らしてしまったが、よく考えれば至極まっとうな質問だ。

僕の本来の所属はコート社の日本法人。アメリカの本社の方は業績悪化とスキャンダルで倒産の危機に立たされている。

子会社の末端社員とはいえ、もしもに備えて身の振り方に思い悩んでいたとしても不思議ではない。

彼女はそんな僕の境遇を慮ってくれたのだろう。

「ええ、まあ、恥ずかしながらそんなところですよ」

僕は逃げ出すように、彼女の出した話題に乗った。

「そうですか。確かに大変なようですね。でも悪いニュースばかりでもないみたいですよ」

意外な一言だった。

今の本社の状況は、外側から見れば絶対絶命そのものだった。仮に僕の持ち出したとされる研究結果を持ってしても、本当に巻き返せるのかは怪しい。

「本社の方に勤めている友人から聞いたのですが、素晴らしい技術が手に入ったから、これで巻き返しを図れると息巻いていました」

「……………そうですか」

誰だか知らないが、彼女には本社側にツテがあるらしい。それもそうか、彼女はコート社本社の提携先の役員だ。個人的な交流があっても不思議ではない。

「でも本当にその技術を発表できればいいんですね」

「? どういうことですか」

何故だが、彼女の口ぶりが怪しくなって来た。

「いえ、その友人の口ぶりからすると、失礼ですが、その技術というのが外部から手に入れたようなんですよ。それも非合法に」

「……………非合法にですか」

チクリと、スズメバチに刺された痛みが心に広がる。

ああ、それはきつと僕がしでかしたことだ。

「ええ、はっきりとは言いませんでしたが、恐らくは間違いないでしょう。こう言っては荷ですが、この業界ではよくあることなんです。悲しいことに」

彼女は若干笑顔を曇らせてそう語った。

それは僕にとつてもありがたいことで、これ以上感情を覆い隠すのは無理だったから。

「そう……ですか」

僕も彼女に習い、暗い感情を憂いの表情に滲ませる。

ただし、僕と彼女ではその性質は違う。

加害者と被害者の違いだ。

「けれども、そのデータが正しいものかを確認するためには臨床が必要となります。人の命に関わることで当然です。しかし、その段階でもし失敗をすれば責任はもちろん、盗み出した側の会社に帰属します。盗用元の会社を訴えるなんて馬鹿なことではできませんね」

確かに彼女の言うとおりで、製薬と言うのは物質自体の精製よりも、安全を立証するため
の臨床に時間がかかる。となれば僕が送ったデータが何であれ、それが本社の経営に特効薬
となるかは疑問符がついてくる。

自分の行動が徒労に終わるかもしれないと言うのに、僕は然程気にはならなかった。多分、

役に立たないことで目の前にいる人に対する免罪符になると思ったからだ。

そうして僕は俯いていた視点を再び彼女に戻し、愕然とした。

「—」

彼女が、大神幾望が僕を睨んでいた。

白百合のように気品ある微笑みを浮かべたまま、細めた目蓋の奥から、視線が僕を射抜いている。

いつからそうだったのか、あるいは最初から僕らの企みを知ってここへ誘い込んだのか。

あるいは、ただただ罪悪感が生み出した幻影なのか、僕には判別が付かない。

けれども、僕は確かに標本にされた蛾のように、ピンで串刺しにされ指一つ動かさなくなっていた。

「もっと質が悪いのは、その開発された時点で明らかに非合法的な人体実験が前提となって技術についてです。技術単体ではそうではなくても、見る人が見れば開発に人体実験が必要なものかどうかは直ぐにわかります。ああ、すみません。釈迦に説法のようなものですね」

「いえ………」

彼女の表情が直視できず、僕は視線を反らした。

本当に気づいているのか、あるいは僕の罪悪感が生み出した妄想か、その判断は最後まで

付かないままだ。

「それに気づかずに発表してしまえば、無許可で人体実験を繰り返したのか、あるいは技術を盗み出したのかを付随して発表することになります。きっと今のコート社には致命傷でしょうね。どちらに転んだとしても」



薄暗い研究室の中を、僕は彼女の背中を追って歩いていった。

小さな体躯、枯れ枝のように細い四肢、暗闇でも解る赤い長髪、実年齢に対して幼い顔立ちの彼女を僕はよく知っているはずだった。

けれども名前を思い出せないし、彼女の顔にも薄くモヤがかかっているようだ。

「川上君は、自分が知らず知らずのうちに異世界に迷い込んでいるじゃないかと不安になったのではないかい？」

僕には彼女の言っていることの意味がよくわからず、とりあえず気の抜けた生返事の出来損ないを返してしまった。

「例えば、帰宅してみたら自宅に住んでいるが全く知らない人達になっているのではないか

とか、見知った人物から突然知らない人扱いされるんじゃないとかそういう妄想だよ」

何も、剣と魔法のファンタジーだけが異世界じゃない。少しだけずれた世界、例えば自分だけの存在が抹消された世界や、自分の社会的な地位が書き換わった世界。今生きてい世界と地続きの癖に主観的には決定的に違う世界。

知らず知らずにそういう世界に迷い込んでいるのではないかという不安。

確かにそれが不安かそうでないかを問われれば誰もが不安だと答えるだろう、しかし、そんな不安は日常生活では考慮する必要のない不安だ。

「なんで、考慮する必要がないと思う？」

だって、そんなこと起こり得ないから心配する必要がない。言わば、杞憂と言う奴だからだ。

「そうだね、確かに現実にそんなのが起こりえるのは『アウトゾーン』か『世にも奇妙な物語』の中だけだ。けど……」

彼女はそう言うのと重厚な作りの扉に掌をかざし、電子ロックを解除した。

ロックの解除に連動して、扉がゆっくりと開いて行く。

「本質的に、今自分が生きてきた前提となる認識が覆されるといふ恐怖は、現実起こり得る恐怖なんだよ」

扉の向こうには巨大な空間に科学プラントのような施設が詰め込まれている。

銀色のパイプがのたうち、うねり。隙間を縫うように足場が組まれ。英文の注意書きが機材に貼り付けられている。

しばらく僕らはその鉄の原生林の中を彷徨っていたが、彼女が一つの銀色のタンクの前で足を止めた。

Advanced・Humanoid、銀色のタンクにはそう書かれている。

「何しろ私達は魂そのものに手を加える技術を手に入れたからね」

彼女の言葉と共に、タンクを包んでいた銀色が消えて行く。どういう原理なのかは不明だが、タンクの中身が露わになる。

水槽の中には、宙吊りにされた脳髓が、あちこちに極細の電極を刺されハリネズミのようになって、力なく骨髄をぶら下げて、生きていた。

「水槽の中の脳……」

水槽の中に入れた脳を覗いた瞬間、僕はそれまで想像したことへの恐ろしさに目眩を覚えた。

ある人はこの光景に神への冒瀆だとか、命を弄ぶ行為だと猛然と非難の言葉を浴びせかけるかもしれない。

きつとそれは反論の余地のない程に正しい。

正しいのだけど、僕がこの光景を悍ましいと感じたのはそういう理由ではない。

この光景は、僕ら世界というものの根底を覆しかねない。

僕らにとって合理的に作られているようにみえるこの世界が、実は浅はかな誰かによって作られたカキワリだと反証しかねない。

そういった危険を孕ませた悍ましさだ。

「これがどういう意味を持っているか分かっていようだね」

僕はガチガチと鳴る奥歯を噛みしめることも忘れ、ただただ恐怖に翻弄されていた。

あの思考実験は実現が不可能だからこそ、無害な思考実験に留められていた。

実現が可能になれば、全人類が本当に今ここに自分が存在しているのかという不安に真正面からぶつかることになる。

誰一人として、そこから逃げ出すことは叶わない。

「そう、誰かに水槽の中で夢を見せる技術があるってことは、その誰かが自分じゃないとは誰も否定できない。ありとあらゆる安全圏を切り崩す代物だよ、コイツは」

彼女はそう言うのとタンクを軽くノックした。

「君は自分の頭にちゃんと脳みそが詰まっているとこれを見ても、主張できるかい？」

彼女は、九頭竜雨美は邪悪な笑みを浮かべて確かに笑っていた。

頭痛で目が覚めた。

眠っていたのは布団ではなく、ソファだった。そのせいか節々は痛むし、喉は渴いて、頭は濁っている。

今日は何曜日だろうか？

もはや、眠っているのか、起きているのかよくわからない。

テレビをつけてみる。

海外の大手製薬会社が破綻し、日本の新興医療機器メーカーの傘下にはいることが発表された。

海外の大手製薬会社はコート社、日本の新興医療機器メーカーは大神繊維医療株式会社。どちらも僕にとっては馴染み深い名前だ。

全国版のニュースはそれで最後だったようで、スタジオが移り各県内のニュースに切り替わる。

長い歴史のある地元の奇祭のニュース、県議会でのプール金の疑惑と続いて、交通事故のニュース。

昨日未明、国道の交差点で乗用車三台が絡む追突事故が発生、信号待ちをしていた二台に酒気帯び運転の車が追突、追突した車に乗っていた会社員の藤島圭吾氏（三八才）全身を強く打ち死亡したとのことだ。

テレビ画面には大破した黒のアルファードが映っている。

僕には、一体どれが本当でどれが嘘なのかよくわからなかった。

「どれが本当で、どれが嘘かなんてどうでも良いんじゃないかな？」

振り返ると、そこには九頭竜主席がいた。

「別に私が居ても不思議ではないでしょう。ここは私の部屋なんだから」

見回して見ると確かにここは僕の自室ではない、『箱の塔』の無菌室、通い慣れた職場の一角だった。

「……………やっぱり免疫障害ってのは嘘なんですね」

僕はいつもの防菌装備を身に着けていない、もちろんマスクもゴーグルもない。

なのに九頭竜主席は平然としている。

「まんざら嘘ってわけじゃないさ。ただまあ、もう病原菌に怯えるような身体は捨ててしまったから不要なだけだよ」

「そう、ですか」

彼女は僕の対面の座に腰を下ろして、足を組んだ。

多少尊大な感じはしたが、いつもと変わらず落ち着いた感じだ。

彼女は枯れ枝のように細い指先で長く赤い髪の毛先を弄びながら興味なさげにこう言った。

「思ったよりも落ち着いているね、また錯乱して押し倒されるかと思ったけど」

悪びれるふうもない。

いや、本当にその部分については彼女自身には悪意も何もないかも知れない。

「いまさら気休めにもならないかもだけど、君の頭蓋骨の中にはちゃんと脳が詰まっている。

あの水槽の中身は君ではないよ」

「本当に気休めですね。そんな言葉なんて……………」

あんなものが実在する限り、他人の証言さえ作られたものである可能性は否定できない。

そもそも彼女が今現在僕の目の前に存在するかどうかさえ、怪しいものだ。

「ではいくらか、気休めの上乗せをつけてあげるよ」

彼女はそう言うのと、身を乗り出し僕の腕を掴んだ。そしてそのまま彼女に首筋に押し当てる。

「握っついでいらんよ」

僕は深く考えずに、その手に力を入れて彼女の首を締め付けた。

が、そこには肉の柔らかさも、暖かさもない。呼吸もなく脈動もなかった。

「あの脳は私の本体。この体は脳なしの端末。ラジコンのようなものだよ」

つまりは、目の前にいるこの女性は精巧にできた機械じかけの人形で、本物はあのハリネズミのように電極の刺さった脳髓。

その脳髓だけの人間が、脳みそのないロボットを遠隔操作して、あたかも一人の人間が存在しているかのように見せかけているというこのなのだろう。

「前に言ったでしょう。サイボーグを作ろうとしても、人間の形に収めるのは到底無理だって」なるほど、だったら脳を据え置き型にして、身体と分離してしまえば良い。理にかなって、合理的だ。

「さらに気休めの上乗せその二。私達の技術を持ってすれば、脳の認識をイジるくらいなら、受信機を埋め込めば、遠隔操作だって可能。もともと、そのためには大掛かりな手術が必要だけどね。そう一〇日間くらい」

つまり、僕が事故して意識不明になっている間に、脳に何かを埋め込んだということだろう。

「それで、そこまでしてあなた方は何がしたかったんですか？」

彼女の言葉を信じるとして、この大掛かりで手の込んだ喜劇を仕込んだ意味がわからなかった。

いや、今となってはどうでも良いことなのかもしれない。

「けっこう即物的な話だよ。私達としては技術力こそあるけど、いかんせん会社の規模が小さくてね。生産拠点、販売網、人材、知的財産、その他全てモノが足りていないというのが実情。と、そこに経営不振に陥った業界大手の世界的企業が産業スパイを送り込んで来た。こいつを利用しない手はない」

「つまり、逆手に取ってコート社自体を傘下におさめてしまえってことですか」

「そう、結果は先程見たとおり。詳しい過程は省くけど、君らの働きの御蔭でもあって見るとの通りの計画は無事完遂された。ありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

まあ、正直あんなブラック企業どうなろうと今更知ったことではない。

「それで」

「うん？ なにかな？」

「なんで僕はまだ生きてるんでしょう」

藤島さんは始末されたようだが、僕はまだこうして生きている。

例え、脳が水槽の中で夢を見ていようとも、死んでしまえば夢をみることも叶わないはずだ。

「勘違いしないでほしい、藤島さんのことは残念だが私達の仕業ではない。旧コート社の連中が口封じとして行ったことだよ。君はなんとか保護することができたが、彼は残念ながら間に合わなかった。そういうことです」

ああ、確かに産業スパイを行ったことをネタに本社を脅すなら、スパイ本人の身柄を抑えて置くのがもつとも手っ取り早い。つまりは、そういうことか。

「さて、川上君。私は秘書としての君の働きを高く買っています。良ければ、私の秘書を続けて見る気はないかい？」

彼女は、僕達が彼女達にしたことも、彼女達が僕にしたことも全て水に流して今までの関係を續けないかと問いかけてきた。

まるで、そんなことはどうでもいいじゃないかと言わんばかりに。

いや、確かにそんなことはどうでもいいんだ。

水槽の中に脳を置くものにとつては全てが夢で、全てが現実だ。

一夜の泡沫と消える出来事も、人々が共有しているはずの確固とした現実も、皆等価にカキワリの、彼女の人生という名の舞台上で上映される劇中劇にすぎない。

彼女はその観客で、演出家で、主演女優。

そして、僕にもその感覚は理解できた。

「九頭竜さん。一つ聞いていいですか？」

「ええ、どうぞ」

彼女は悪意のない笑顔を浮かべ、僕の質問を促した。

「貴方の脳操作技術で、起きたまま睡眠と同じ効果を得ることはできますか？」

「うーん、川上君のレベルの処理では無理かな」

ということとは、脳を弄る度合いを上げれば可能ってことか。

まあ、どうでもいいけど。

「では今日は有給を頂いて休ませて頂きます。最近まともに寝てないので。くれぐれも安眠を妨害するような操作は控えてください」

もとより、碌でもないしがらみに雁字搦めにされた現実に興味はなかった。

それなら、彼女の秘書という仕事もむしろ渡りに船という奴だ。

ただひとつ不満を述べるなら、僕はひたすらに眠たかった。

現実という不安が消え失せた安心感からか、あるいは彼女達の脳操作の反動か、だがそんなことはどつちでもよく、ただただ、純粹に睡眠欲を解消したかった。

だから僕は彼女の返事を聞く前に、目を閉じ身体を横に向け、向こう側の世界へと向かった。

「そう、ではまた会いましょう。良い夢を」